

鐘ヶ江 賢二（考古学）

胎土分析からみた九州弥生土器文化の研究

本論文は、土器胎土分析により、九州を中心とした弥生時代の土器生産の単位や消費範囲を復元し、弥生社会に対する一定の評価を行った。さらには韓半島南部地域と壱岐・対馬あるいは北部九州との土器からみた交流に関する理化学的な根拠を提示し、弥生時代の対外交流に関する新しい展望を打ち出している。また、土器の色調というこれまであまり注目されてこなかった土器の一要素を科学的に分析し、土器製作者の何らかの κατηγοリーを抽出し、土器の色調が意味する弥生社会の歴史像に迫った。

第1章～第3章では、弥生時代の土器研究における土器胎土分析の意義と目的を明確にした。分析の方法としては蛍光X線分析と岩石学的分析を併用させることが有効であることを説く。さらに、考古学における土器生産単位とその消費単位の学史を整理検討した後、土器胎土分析からこうした問題へのアプローチの仕方を検討している。さらに第4章で、北部九州における弥生時代の土器胎土分析の研究例とその有効性について議論し、分析方法の具体例を提示するとともに、蛍光X線分析のデータから得られる生産単位と消費単位のモデルを提示した。

第5章では、北部九州の弥生時代中期・後期を中心とする具体的な資料分析とその結果を示した。また、第6章では、壱岐・対馬の弥生中期・後期の土器胎土分析を行い、その結果を示した。これを踏まえて、第6章では韓国勸島遺跡の弥生系土器や韓国無文土器の胎土分析を行い、壱岐・対馬の資料との比較を行い、生産地の特定と土器の交流や人間の移動を考えた。さらに第7章で北部九州弥生土器の色調を時代別、地域別に比較検討した。

第8章では、第5章から第7章までに示した分析結果を踏まえ、第4章で提示したモデルとの対応を検討し、問題設定で提起した土器胎土分析からみた弥生社会像を論じた。それによると、近年学界で提起されているような弥生集落内での専門的な土器生産システムが存在したのではなく、弥生中期にあっては小規模な生産単位とその内部での閉じた消費単位が確認されるとともに、弥生後期にあってはその消費単位が拡大し、交易などの物流が高まったと解釈する。また、弥生中期の韓国勸島遺跡の弥生系土器は壱岐から運ばれたものの可能性とともに、勸島遺跡内で生産されたものもあることを示した。一方、弥生後期には、壱岐・対馬を介した島伝いの交流のあり方が復元され、そこには人々の動きも存在する可能性を述べた。さらに、土器の色調の分析から、弥生中期における強い色調の規制が確認されるとともに、弥生後期にはこうした規制が緩んでいく過程を示した。最終的に第8章で議論した内容をまとめる形で、弥生中期から後期、さらには古墳時代に至る社会変遷をまとめ結論とした。

以上のように、土器胎土分析を用いて、弥生時代の九州における土器生産と流通、消費のシステムを明らかにし、さらに遠隔地の土器を生産する社会的な行為を評価するとともに、粘土の採取や発色に、社会的・環境的な制約があることを示した画期的な論文である。

よって本調査委員会は、申請論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分であると認めるものである。